

# 保育の場とジェンダー

金子 省子

## 「ジェンダー」をめぐる動きから

ジェンダーという言葉は、社会的・文化的性別の意味で用いられているが、近年ジェンダー（フリー）バッシングが強まっているといわれる。こうしたバッシングのなかには、ジェンダー・フ

リーを、生物学的差異を無視し、あらゆる性区分を機械的に消滅させるものと捉える誤解がある。しかし、ジェンダーに敏感な視点をもつことは、生物学的差異を無視するのではなく多様なあり方（その人らしさ）を尊重する立場に立つことに他ならない。教育についていえば、ジェンダー・フ

リーの教育実践は、教育の場を男女平等にする側面とジェンダーに敏感な視点をもつ主体を形成するという側面をもち、両者は相互にかかわりあうものである。

### 保育の場を取り上げることの意味

三歳前後には、「女／男」というカテゴリーの存在と自身がどちらに属するかを知り、男性あるいは女性について人々が共有する信念であるジェンダー・ステレオタイプ（外見や態度、興味、心理的な特性、社会的な関係、職業などについての情報が含まれる）について理解し始めるようになる。そして、幼児期のジェンダー形成にかかわるものとして、親をはじめとするおとなや周囲の子ども、玩具・日用品、絵本・テレビなどのメディアが指摘されてきた。しかし、日本で保育所・幼

稚園のような保育の場そのものを取り上げた研究は多いとは言えない（註1）。出生直後から「女児／男児」に期待され準備される養育環境は異なり、その影響を受けているにもかかわらず、乳幼児期にはこれにより形成される差異に関心がはらわれにくいことや小学校段階以上に比べ、保育者の言動などの外部からは見えにくい領域がより大きいことも、保育の場のジェンダーを捉える困難さとなっている。

保育所・幼稚園は、集団において、「女児／男児」という区分が具体的に示されるなど、幼児のジェンダー形成に影響を及ぼすと考えられることから、その実態を明らかにすることが重要と考えられる。ここでは、保育の場とジェンダーについて、保育環境と保育者のジェンダー観に焦点を当てて考えてみたい。

## 保育環境と保育者のジェンダー観

— 保育の場にみられる性区分と

これについての保育者の意識—

保育所・幼稚園に家庭からもち込まれるものにはすでにジェンダー・ステレオタイプが指摘できる。ただ、これにあてはまらない場合があるにもかかわらず、保育者によって表現される子ども像には、やはりステレオタイプを指摘できる場合がある。筆者らの調査（註2）をもとに、保育環境の性区分の実態の一端とこれについての保育者の意識をみてみよう。

子どもを取り巻く物的な保育環境としては、名簿をはじめとし、園が用意する用品類が含まれる。筆者らの調査した地域では、保育所のほとんどは「男女混合名簿」であるが、幼稚園では「男

女別名簿」が五割を占め、「男女混合名簿」は約四割、他に「両方の名簿」をもつ園がみられた。

靴箱などの配置も保育所のほとんどが「男女混合の配置」であるのに対し、幼稚園では靴箱・ロッカーなどが「男女別の配置」や「男女ペア」になっている所が五割程みられるなど、幼稚園と保育所で大きな違いがあった。幼稚園と保育所の目的や入園方法などの違いが反映されている面もあるが、結果として幼稚園で性区分がより多くみられた。

物的環境の他、保育者の指示による男女別の「日常の集合」や「式の際の集合・整列」は、全体に頻度は低いものの、対象地域の幼稚園と保育所では幼稚園の方がより行っている傾向がうかがわれた。

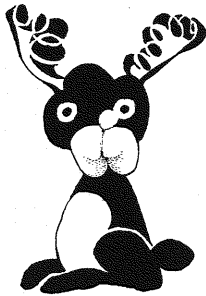
保育者は、物的・人的環境の性区分を望ましい

ことと評価しているわけではなかったが、改善したいという意見はほとんどみられなかった（註3）。慣習として認めるほか、子ども自身が理解しやすく、保育者が活用しやすい分類とみなされ使われており、「男／女」の理解は発達上必要なことであるという意識のもとでの使用も一部にみられた。

#### —保育者のジェンダー観—

保育者を対象とした先の調査結果から保育の場にかかわる保育者のジェンダー観をみてみよう。

保育者は、幼児期の身体的能力や興味関心などの性差については、特に差がないものと捉



えていた。一方で、子どもへのかかわり方として、「女らしく男らしく育つように」への賛意は低く、「できるだけ同じように扱うが身体的違いに配慮する」ことは肯定的にみられている。また、「男女同じように扱い差が生じないようにする」や「すでにできつつある違いをなくすため積極的に働きかける」ことについても肯定的な傾向がみられた（註4）。最も支持されたのは「子どもの自主性・個性を最優先する」であるが、このような姿勢が、もしバイアスを是正する積極的なかわりの必要性についての認識を欠く場合には、ジェンダーの再生産を問題として意識化できない危険性があると考えられる。子どもが多様なあり方を肯定されるとともに、ジェンダー・バイアスに気づくことのできるような働きかけが必要であろう。ジェンダーに関するワークショップを数

多く行ってきた峯田（註5）は、子どもから発せられるジェンダー・バイアスを含む発言も、「言ってはいけないこと」と否定するのでなく、共に考え、多様な考えに触れる姿勢で臨むことで、子どもの中に気づきが生まれるとしている。

今回の調査では、保育者のジェンダーやジェンダー・フリー保育に関する授業・研修などの学習経験をもつ場合、バイアスを是正するような保育者の積極的なかわりを肯定する意見が明確になることがわかった。

子どもも保育者もそれぞれに、性別期待を受けて成長してきている。そこで自明視してきたジェンダーにかかわる事項を「おかしい」と否定されるのではなく、多様な受け止めをしている様々な人々のいることを知り、「あたりまえ」を捉え直すことのできる学習機会が保障されることが必要

なのではないか。ジェンダー視点からの問いは、保育者にとってもジェンダーのとらわれに気づき、これに向き合うことといえるだろう。男女混合名簿を導入すれば問題が解決したかのような誤解すらある現状（地域によっては導入を後退させる動きがある）をみると、保育環境をジェンダーの視点で細部にわたり見直すと同時に、「分けない」対応に終わらない努力もまた保育者に求められている。そのような保育者を支える情報提供や教育・研修がすすめられなければならない。

（愛媛大学）

註

1 山梨県立女子短期大学の取り組みは、この点で先駆的なものであり、保育者養成を行う大学が中心とな

り地域とともに進めた実践研究である（山梨県立女子短大研究プロジェクト&私らしく、あなたらしく\*やまなし編著 『0歳からのジェンダー・フリー』生活思想社、二〇〇一）。

2 二〇〇四年七月から九月にかけて、m市を中心とし、保育所・幼稚園の主任を対象とした保育環境に関する調査を行い、七十二園より回答を得た。このうちの保育所二箇所、幼稚園三箇所に対しては、全保育者・保護者を対象とした質問紙調査を行った（金子省子、青野篤子「保育にかかわる保育者のジェンダー観について」日本保育学会第五十八回大会発表論文集244〜245、二〇〇五）。

3 保育者調査では、「靴箱の配置」「物品・教材」「ほめ方・教え方」「手伝い」「呼称」「グループ分け」「集合」「着替え」といった事項について頻度と望ましさをそれぞれ五段階で聞いた。最も頻度の高いもの、最も

望ましいという回答が五点となるよう得点化した。望ましさで最も肯定的な「呼称」でも、M $\parallel$ 2・64であった。

4 各項目について、「1. まったく望ましくない」から「5. 非常に望ましい」までの5段階で聞き、最も肯定的な回答が五点になるよう得点化した。「女らしく男らしく育つように」（M $\parallel$ 2・38、SD $\parallel$ 0・85）、「できるだけ同じように扱うが身体的違いに配慮する」（M $\parallel$ 4・45、SD $\parallel$ 0・78）。また、「男女同じように扱い差が生じないようにする」（M $\parallel$ 3・91、SD $\parallel$ 1・07）「すでにできつつある違いをなくすため積極的に働きかける」（M $\parallel$ 3・85、SD $\parallel$ 0・98）「子どもの自主性・個性を最優先する」（M $\parallel$ 4・64、SD $\parallel$ 0・71）

5 峯田美香氏は、NPO法人アートフルFの代表で、独自の教材開発やワークショップを行っている。